

# 複数写真におけるイメージとサイズの均衡について

大阪芸術大学 美術学科 教授 日下部 一司

写真を成り立たせている「イメージと支持体」についてこれまで考えてきた。写真は世界を矩形で切り取ることで成り立つことや、レンズを通して表現される光の痕跡であること、また何らかの支持体の上に現れる現象でもあることなど、さまざまな興味がこの研究を継続させている。特に支持体の持つ物質感についての興味が当初からあり、ピグメント法などの古典印画法による印画研究を継続しているのも、デジタル画像になって失われた写真の物質感・触覚性という側面を今日的な視点で捉え直そうと考えているからである。

記録性という観点で写真をとらえるならば、その物理的な大きさは特に問題にはならない。しかし写真は面積を持ち支持体を必要とする「物体」でもある。印画には紙、モニターに現れる画像には液晶が必要だ。プロジェクターで投影する写真には壁面やスクリーンを用意しなければならない。つまり写真は物質と関わらずに見ることができない仕掛けになっている。

このように写真が物質に付随するメディアとするならば空間・量感に影響を受けることになるだろう。ものの大きさは自分の身体の大きさを基準に認識されるものであり、いつも身体・皮膚の延長にある空間を意識し、そこに存在する様々なものを感じとっている。写真を見るということは写真の内容を読むことだけではなく、その量感を触覚・視覚的に感じることもあるはずだ。

アンドレアス・グルスキーの写真は、巨大でシャープな画面が特徴である。大きな建造物の室内や自然を、実物大ではないかと思わせる大きさで出力し、しかもレンズの収差なども目立たない精密さで表現している。

かつて、8×10で撮ったアンセルアダムスのヨセミテ写真を見たときの画面の精緻さは、自然の中で動く蟻の一匹一匹が完璧に写し取られているのではないかさえ思わせたが、グルスキーの写真は写真のサイズがアンセルアダムスのそれとは基本的に違う。究極のデジタル画像を駆使したグレンスキーの写真は、物の表面が実物大で写っているのではないかと思わせる凄みがある。

しかし、その精巧な写真も近くまで寄って細部を見ると粒子（ピクセル）レベルで、通常の写真と変わらない。巨大なサイズが錯覚を生む。結像の精度としては、あの大きさほど精緻ではないことを不思議に思わせる。分子レベルのサイズが原寸大で写らない限り、写真の再現性追求という点ではまだまだ技術的に未熟なのかもしれない。

写真と大きさについての諸問題は、例えばグルスキーのような「巨大さ」によってまず意識させられるの

である。それは1960年から70年代初めにアメリカで起こった「ハイパーリアリズム」という写真を用いて対象を克明に描写する美術の潮流と、その大きさと細密性において似ている。ハイパーリアリズムは写真の持つリアリズムをアナログの力で誇張したのに対し、グルスキーはデジタルの力でそれを行った。

しかし、こうした「巨大化」という方向の認識とは別に、もう少し繊細な大きさへの解釈がある。それは個々の作品の大きさではなく、空間や環境を意識した写真のボリュームについてである。あるいは複数の写真による空間と作品の均衡というような問題であり、その問題を今回の研究テーマとしている。

ゲルハルト・リヒターは、彼の展覧会における作品に関して「作品は役者だ」と述べている。つまり展覧会場によって役者を替え出演させるが、役者どうしの関係によって役割が変わってくる。つまり複数の作品が会場を作るとき、作品の意味の変容が起こるのである。彼は作品を複数並べることを最初から意識し許容しながら制作しているのであり、その立場を私自身も支持するものである。

巨大化という方向があるなら縮小化という方向も考えられるだろう。巨大化から縮小化のグラデーションの中で写真という物質が一人一人の役者として「物語」を作っていくような構成について今回の研究では実制作の中で試みている。それは「組み写真」と呼ばれるやり方ではなく、無関係な写真イメージが新たな関わりを持って意味を生じさせるというような方法についてである。

展覧会等の展示についてはもちろんだが、印刷物としての写真構成にも興味を持っている。実体を持たないデジタル写真（デジタルイメージ）が最も似合う居場所は、モニターかオフセット印刷などの印刷物ではなかろうかと過去に結論した経由もあり、今回はB1サイズの紙の裏表に写真を構成し、それを折りたたむことで立体的かつ時間差を取り込んだ触覚的な提示を試みた。それは印刷物としての写真を再考するきっかけとなった。

物理的に巨大な作品であるのにもかかわらず展覧会図録を見ると、A4サイズにはがき大で印刷された作品写真が並ぶ。まさか原寸大の図録も作れないが、印刷物という閉じた空間に配置することを意識する必要があるだろう。そうしたら必ず図録の大きさは平均的なサイズを嫌うことになるだろうし、ページに配置される写真と余白の問題も考慮されるべきだろう。こうした問題は、今後の課題としてこれからも追求していきたいと考えている。